

「命の手紙」

3年 Y.K

ある時、母が涙を流しながら一つの新聞の記事を切っていました。いつもだったら新聞を読み終えたら、そのまま置いておくのに、わざわざ新聞の記事を切っていたので、どうしたのだらうと思い聞いてみると、「どうしてもこの記事は捨てられないの。あなたも読んでごらん」と言われ、母が切った記事を読んでみました。その記事は、まだ幼い女の子に両親が送った手紙でした。その女の子は今年の2月25日に肺、肝臓、腎臓の臓器提供をしました。インフルエンザ脳症で入院していて、脳死の状態でした。そのためこの臓器提供は、その女の子の意志ではなく、家族や親族13人の総意で決めたものでした。脳死の状態でも、生きている事は生きています。そんな状況の中で、生きている自分の娘の臓器の提供を決めた両親は、本当に辛かっただろうかと、とても胸が苦しくなりました。その記事の中央には大きく「繋がる命 愛情注いでね」と書いてありました。その言葉は、その女の子に両親が苦しんで、悩んで、その女の子にお願いしたことでした。

その女の子が体調を崩してから両親は、とても辛かっただろうと。毎日毎日神様はもちろん、山に行っても治るようにお願いし、川が見えればお願いし、海に向かっても、しまいは落ちていて石ころにも、目に見えるもの全てに、自分とその女の子が入れ替われないかとお願ひしたそうです。でも、どうやっても入れ替る事は出来ない、もう目を覚ます事は無い、一緒にはいられないと思ひ、毎日辛くて寂しくて泣いてばかりいた時に、病院の先生から臓器提供の話があつたそうです。「臓器提供」と聞くと、文字通り臓器を提供するという事ですが、その記事には「お父さんやお母さんみたいに涙にくれて生きる希望を失っている人の、臓器提供を受けなければ生きていけない人の希望になれる」と書いてありました。これが書かれていた「繋がる命」です。両親は臓器提供を必要としている人、それを見守る人たちがどんなに辛く苦しい思ひをしているか知っています。ですから、その女の子が臓器を提供したら、その女の子が人を救う事が出来たり、その周りの皆さんの希望になれるとしたら、そんなに素晴らしい事はない、こんなに誇らしい事はない、生きて証じゃないかと思つたそうです。確かに臓器提供をしたら、臓器提供を必要としている他の家族は助かります。しかし、脳死はしているとはいえ、その女の子は事実上生きていて、どんなに可能性は低くとも、もしかしたら目を覚ますかもしれません。そんな中で両親は自分たちのように苦しんでいる人が一人でも笑顔になる方を選びました。命は繋ぐもの。両親がその女の子に命を繋いだように、その女の子にも困っている人に命を繋いでほしいとお願ひしました。そして天国から、その繋いだ命にありつたけの愛情をその人に注いでほしい。この両親が決断したことは、私達が思っているものの何倍も、何百倍もつらくて苦しい決断だつたと思ひます。今ではその女の子によって、その女の子が天国から愛情を注いでいる命、繋がれた命があります。その繋がれた命がこの世界で最大限に生かされますように。その女の子も天国でこの事をしっかりと理解して、幸せになりますように。私たちはその事を祈ります。

私も母と同じように、この記事は捨てたくない、持っておかなければならないと思いました。そして、私が今生きている事に感謝しなくてはならないと強く思います。